

まごころだより

2019. 9月号

ベルギーからのお客様

8月の初旬にベルギーからのお客様がいらっしゃいました。若い男女の学生さんです。この話を聞いた時には以前にも外国の留学生を招いたことがあったので驚くことはなかったのですが、今度はベルギー一人で言葉がフランス語だというので慌てました。少しは英語が通じるのかと思いましたが、ほぼ通じないとこのことでサアどうしたらいいのか。もちろん日本語が理解できるわけもありません。まずベルギーの国名は知っていますが、何処にある国なのか世界地図を引っ張り出してきてようやく分かった次第です。失礼のないようにしなければいけませんがまあ何とかなるだろう等と思っていました。しかし、もてなすにしても思いが伝わらなくてはお互いに何をどうしたらよいのか困ってしまいます。そこで最近では翻訳機などというとても便利なものがあって、早々に手に入れて当日にそなえました。「まごころ」では普段からみんなで作っている物を体験してもらえたらいふことで「白玉」のこねる事からやってもらいましたが、彼らが言うにはその感触はクッキーの材料に似ているとのことでした。こうした作業の中でもお互いの聞きたい事をお互いに話したことで少しは親睦を深められたのではないでしょうか。利用者の方もヨーロッパからの訪問者ということで興味津々のようで、「あなたはどこから来たの?」と話し掛ける人もいてとても良い雰囲気でした。短い滞在時間の中で私たちのもてなしをどんな風に感じてくれたのかわかりませんが、気持ちは伝わっていれば良いなと思いました。



マンさんの夏休み

先月の「まごころだより」に紹介しましたベトナムの実修生のマンさんが夏休み期間も「まごころ」に来たいと願い出て受け入れました。目的はやはり日本語が上手になりたいことです。日本の友達が少ないと、普段から日本語会話が少ないと、利用者はすでに彼とは顔なじみで言葉の点は理解してくれていますから何時もの感じで普通に接していましたし、何よりも優しい所が気に入っているようでした。彼が日本で目標とする介護福祉士の取得は専門知識や技術だけでは十分ではない事をわかっています。高齢者の話し相手やその方が何をして欲しいのかを察して対応しますが、言葉が理解できなければ前には進めません。幼い子供は家族や友達との触れ合いの中で言葉を覚えていきますが、その上達の速さには目を見張るものがあります。ですが成人になると一旦言語を翻訳してから言葉にすると言われています。我々日本人にしても外国語を流ちょうに話すには

並大抵の努力ではなしえないでしょう。よく似た単語で異なる意味を表す日本語は特に難しいといわれています。マンさんはその日本語を使って介護という仕事に挑戦しようとしています。私達にすれば少しでも彼の力になればいいなという思いです。

恒例の納涼祭

「まごころ」では8月の末に恒例となった納涼祭を催しました。利用者・児童・地域の方・職員合わせて100名足らずのお祭りではありましたが、盛況のうちに無事終える事ができました。納涼祭では特に地域の方達やボランティアの方に沢山の協力を頂きました。100名ほどの食材の準備を2日連続でお手伝いいただいたり、当日には朝早くから終了するまで何かとお力添いをいただき大変たすかりました。地域の方やボランティアの方のご尽力には改めて心からの感謝と御礼を申し上げます。ありがとうございました。

参加頂きました「まごころ」の利用者はとても楽しんで頂いたようです。そして児童館の子供さんには最後に「また来てくれる？」と尋ねると「今度いつやるの？」と返してもらって、招待して良かったと救われることばをいただきました。年に一度のお祭りですが、その間に食事会などでお誘いをしたいと考えています。

皆様本当にありがとうございました。

